

# ア カン サ ス ポータル通信 第2号

## WebClass<sup>①</sup>を使った出席確認

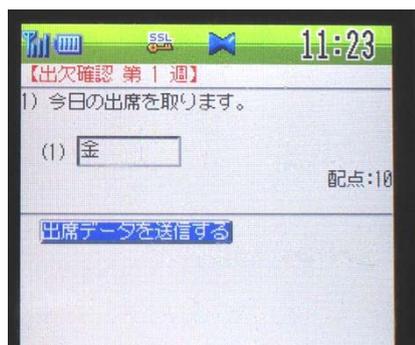
出席確認には労力を要する。大人数講義だと出席記録をつけるだけでもかなりの負担を強いられる。名前を書き忘れたコメント紙が見つかるが大変だ。わずかな手がかりからその学生を特定する探偵役をついやってしまう。複数教員で担当する授業だと出席表の管理が問題となる。そこで本稿では、先生方の負担減少を願いながら、WebClassを使った出席確認の実践例を紹介する。

<sup>①</sup>WebClass…アカンサスポータルに組み込まれている学習管理システムの名称。ポータル内の「時間割」にある授業名をクリックして表示される画面がWebClassの画面である。

### 1. 携帯電話とWebClassで出席をとる

「じゃあ、今日のキーワード言うよ。出席確認するから。今日のキーワードはね…電気の『電』」先生がそう告げると、150人ほどの学生は一斉に携帯電話の操作を始める、火曜日3限目に開講されている「マスメディアと現代を読み解く」の一場面である。授業を担当する宇野文夫客員教授(地域連携推進センター)は、昨年度より「携帯電話とWebClassを使った出席確認」を行っている。

この出席確認の仕組みは、「学生が授業中に携帯電話でアカンサスポータル(からWebClass)にアクセスし、指定したキーワードを正しく入力すれば出席とみなす」というものである。



携帯電話でのキーワード入力

簡単な手順は次のとおりだ。授業が始まる前、WebClassの「出席確認」にキーワードを問うテストを1問作る<sup>②</sup>。宇野先生の場合は漢字一文字。テストには利用時間を設け、授業中だけアクセスを可能とする。授業が始まると頃合いをみて学生にキーワードを伝える。それを聞いた学生は携帯電話からアカンサスポータルにログインし、授業内の「出席確認第〇週」の設問にキーワードを入力する(左図)。回答はWebClass上で自動判定されて記録表に保存される。

ちなみに携帯電話を持たない学生やアクセスできなかった学生については、後でコメント紙をもとにWebClassの出席表を修正している。

「メディアを扱う授業だから、いろいろ試してみないとね」と宇野先生。好奇心のあらわれでもあり、先生の授業観ともいえそうだ。学生の受け取り方には2種類ある。普段から携帯電話でのネットサーフィンに慣れた学生にとっては、「普段の操作と同じ」らしい。一方、携帯電話をほとんどメールにしか使わない学生にとっては「数回の練習が必要」とのこと。要するに慣れの問題なのだろう。

<sup>②</sup> テスト問題の作成…5ステップ程度で作成可能。FD・ICT教育推進室まで連絡いた

できれば、一緒にパソコンに向かいながら操作をご説明します。

## 2. メリット / デメリット

出席確認は“イタチごっこ”だと言われている。新しい方法を開発しても賢い学生によって抜け目をくぐり抜ける方法が開発され、堂々巡りに陥るという意味である。今回取り上げた「携帯電話とWebClassを使う方法」にも問題がないわけではない。例えば、次のようなズルが予想できる。(a)携帯電話のメール機能を使って教室外の学生にキーワードを伝える。残念ながら、この方法を防ぐ手段はみあたらない。(b)アカンサスポータルのログインに必要なIDとパスワードを予め他の学生に渡しておき、出席した学生が他の学生になりすまして回答する。このズルについて、パスワードを発行しているFD・ICT教育推進室では「アカンサスポータルにはその人の成績、健康診断の結果、メール情報、登録内容など多数の個人情報すべて掲載されているので、他人に貸すことはしないだろう」とみている。この方針は他の大学でも同じようである<sup>③</sup>。

労力という点からは、「携帯電話でキーワードを送信しなかった学生のために、結局はコメント紙の集計をしなければならないではないか？」との意見もある。だが、コメント紙に「□この紙で今日の出席をとることを望む」とのチェック項目を印刷しておけば、読むだけでよいコメント紙と集計に回すべきコメント紙とを大別でき集計労力の減少につながるだろう。他にも携帯電話の機種によっては「IDとパスワードを2回入れないといけないのが面倒」という指摘もあり、システムの利用容易性は大きな課題である。他にも学生から「通信料がかかる」との意見が出されたが、全授業を通して数十円程度である場合が多く、使用前に信頼関係をもってお願いすればおそらく認めてもらえるであろう。

それでもWebClassを利用した出席確認は次のようなメリットがある。(A)自動集計による労力の軽減。(B)アンケートと出席確認を兼ねた授業改善用データなどの収集(共通教育科目「一歩進んだPC活用講座」などで実施)。(C)学生自身による過去の出席記録の確認。(D)複数教員間での出席記録表の共有。この方式を採用している共通教育科目「学生と大学システム」では学生に送信操作を求めず、コメント紙をもとに教員が手入力している。自動集計に主眼を置いていないようだ。

<sup>③</sup> 学生同士のなりすましへの警戒…第14回FDフォーラム・第4ミニ・シンポジウム『大学教育におけるeラーニングシステムの可能性』でも話題になった

## 3. 出席確認

金沢大学共通教育機構の「共通教育機構と共通教育科目の担当等に関する教員マニュアル」には、学生の出欠について、学生の単位取得には原則として3分の2以上の出席(一部5分の4)が必要であること、できるだけ出席をとることにするようお願い、ただし遅刻や欠席の扱いについては各先生に一任するといった内容が記載されている。何を目的として出席をとるのかについても先生ごとの教育方針が存在するはずで、出席確認自体が既に深いテーマである。

本稿では、方法のひとつとしてWebClassを使った実践例を紹介した。他にも工夫ある出席確認方法に関する情報があれば、ぜひ右記の連絡先までお知らせいただきたい。

【文責 末本哲雄】

制作：FD・ICT教育推進室 (FD/SD・ICT教育支援部門)

末本 哲雄 ・ 竹本 寛秋

電話：内線 角間(81)-5804

メール：e-support@el.kanazawa-u.ac.jp

(ID・パスワードの発行依頼、操作方法もこちらまで)

URL：http://www.el.kanazawa-u.ac.jp/home/index.html